

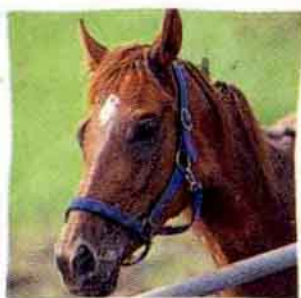
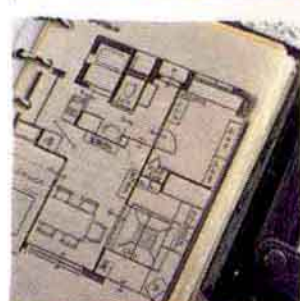
現代へいまを生きる主婦たちの頑張り記録

涙と 勇気が 出る 話

上

家族のきずな

私の昨日・
今日・明日



主婦の友
ミニブックス



日本家庭主妇

本書のご感想をお聞かせいただけませんか？

①この本で役に立ったのはどんなことですか。

②今後このシリーズに、どんなテーマがほしいですか。

この2つの質問にお答えいただいたかたの中から、抽選で50名様に文庫本サイズの布製ミニポーチをさしあげます。応募の際には、あなたの年齢と、できればご家族の構成もお知らせください。あて先 〒101 東京都千代田区神田駿河台2-9 主婦の友社第3事業部主婦の友ミニブックス「涙と勇気が出る話(上)〈家族のきずな〉」係



讲述主妇与家庭间物
有在的

主婦の友ミニブックス

現代〈いま〉を生きる主婦たちの頑張り記録

涙と勇気が出る話(上)〈家族のきずな〉

私の昨日・今日・明日

平成9年6月26日 第1刷発行

編者／株式会社主婦の友社

発行者／石川康彦

発行所／株式会社主婦の友社

〒101 東京都千代田区神田駿河台2-9

☎(編集) 03-5280-7531 (営業) 03-5280-7530

印刷所／凸版印刷株式会社

©SHUFUNOTOMOSHA CO.,LTD. 1997

Printed in Japan

ISBN4-07-221735-2

落丁本、乱丁本の場合はおとりかえします。

図本書の全部または一部を無断で複写(コピー)することは、著作権法上での例外を除き禁じられています。本書からの複写を希望される場合は、日本複写権センター(☎03-3401-2382)にご連絡ください。

本書は「私の昨日・今日・明日」(「主婦の友」誌に連載中)を文庫化したものです。

¥680

現代へいまを生きる主婦たちの頑張り記録

涙と

勇気が出る

(上) 家族のきずな

私の昨日・今日・明日

主婦の友ミニブックス

図書館
章

はじめに

『主婦の友』編集部には毎日たくさんのお便りが寄せられます。

主婦として、母として、妻として、家庭に起こるいろいろなでき事に立ち向かい、それを解決するために身につけた暮らしの知恵の数々。一見、平凡で穏やかな生活のむこうに、ひよつとしたら、必ずしも平坦ではなかったかもしれない家族の歩みが垣間見えることがあります。

あなたやご家族のお話を聞かせてください……お便りをくださったかたがたの家庭や職場を訪ねて取材を重ねているのが、『私の昨日・今日・明日』という連載です。

どの家庭も、夫婦ゆえ、親子ゆえのさまざまな

問題をかかえて、現代へいまを生きています。この本に登場する10組の家族が受け止め、乗り越えてきた問題……未婚の母が新しい家庭を築くまでの道のり、継母として3人の男の子の親になること、夫の失業、見知らぬ土地での生活、夫婦で事業を始める困難、不慮の事故や天災などなど、笑顔さえ交えて語ってくれた等身大のエピソードは、普通に生きることのむずかしさを伝えるとともに、一生懸命に生きることの美しさを教えてくれることでしょう。

その後の様子を伺った再取材も加え、一冊の本にまとめました。どこにでもいる普通の主婦たちの涙と勇気の頑張り体験が、この本を手にとってくださったあなたの元気のもとになりますように。

主婦の友編集部



杉山祥子さん

現代〈いま〉を生きる主婦たちの頑張り記録

涙と勇気が出る話(上)〈家族のきずな〉

— 私の昨日・今日・明日 —

目次

2 はじめに

第1章

家族までの長い道のり

8

未婚の母、子連れ結婚、双子出産。
いま平凡な幸せをたいせつにしたい

● 杉山祥子さん (27歳・静岡県)

表紙デザイン／落合光恵
レイアウト／編集社
編集／主婦の友社、
オプトコミュニケーションズ



田野口尊子さん



木下つる子さん



幅上美樹さん

第2章

28

継母との関係に悩んだ自分だから、
3人の男の子の継母になれた

● 田野口尊子さん (26歳・岡山県)

夫婦二人三脚

町工場を襲った不景気。

5人兄弟を育てながら夫婦で弁当屋開業

● 上澤弥生さん (35歳・神奈川県)

田舎の魅力、
それは自分の手でつくって守る、確かな暮らし

● 幅上美樹さん (32歳・長野県)

結婚して20年。

なまりで言葉も通じない漁村がつのすみかに

● 木下つる子さん (43歳・青森県)

第二のオグリキャップ誕生が目標。
夫婦で生産牧場をスタート

● 渡辺志織さん (27歳・北海道)



上澤弥生さん



渡辺志織さん

第3章

突然の悲しみを乗り越えて

阪神大震災に教えられた、
平凡な日常のありがたみと街への愛着

●西山久実さん（28歳・兵庫県）

地下鉄サリン事件に遭遇した夫が生還。
過去の不運はもう嘆かない

●金子牧子さん（28歳・埼玉県）

長男の水死事故。
身にしみた家族のあたたかさ友人の励まし

●甲把 薫さん（34歳・高知県）

阪神大震災から1年。
1日も早く家族4人の暮らしをとり戻したい

●前田夕子さん（24歳・兵庫県）



西山久実さん



甲把 薫さん
前田夕子さん



○本書に登場するかたがたの年齢・住所は「主婦の友」誌に掲載当時のものです。
また、近況を伺った再取材は、平成9年3月から4月にかけて行いました。



金子牧子さん

家族までの 長い道のり

第1章

「家族」って、何でしょう。家族にとってたいせつなことは？ この章に登場する2つの家族が歩んだ、ひとつ屋根の下に暮らすようになるまでの長い道のりは、家族になることの意味と、家族であるために必要なことを教えてくれます。

未婚の母、子連れ結婚、双子出産。 いま平凡な幸せをたいせつにしたい

杉山 祥子さんしょうこ（27歳・静岡県）

出会いは移動献血車の中。
いい腕した人だなあ」って

夏の日ざしがまぶしい日曜日の昼下がり。杉山さん一家5人が自宅からほど近い公園の木陰を散歩していました。祥子さんが生後3カ月の双子の1人・優市くんを抱き、夫の修さんが双子のもう1人・花菜ちゃんのベビーカーを押す。そのベビーカーを3歳の祥吾くんがのぞき込む。ごくありふれた家族の風景ですが、こんな日がやってくる

PROFILE

昭和41年、静岡県生まれ。県立短大卒業後、看護婦になるが、3年目に未婚のまま祥吾くんしょうごを出産。子育てしながら働いていた血液センターの移動献血車で採血したのが縁で、ご主人の修さんおさむ（38歳・建設会社勤務）と結婚。4月に双子の優市くんゆういちと花菜ちゃんを出産した。将来は看護婦への復職を考えているが、子どもも、もう1人ほしいという。

「体が小さいのに、双子を出産して、3人の子育てと家事をこなしてくれている。感謝していますよ」と、修さん



ことを、ほんの2年前まで、祥子さんは想像したことがありませんでした。

祥子さんが、修さんと知り合ったのは、平成4年の4月のこと。看護婦として、移動献血車で採血の仕事をしていた祥子さんの目の前に、ニュツとさし出された太く、たくましい腕の持ち主が修さんでした。

「1日に30本くらいの腕に針を刺していましたから、腕を見て、この人はどんな仕事をしているんだろう、どんな性格の人だろう、とかってに想像したりすることもあったんです。主人の腕は血管も太くって、いい腕してるなあって妙に印象に残った。腕にほれたのかもしれないですね」(笑)

修さんは修さんで、血をとられることに緊張する人たちを明るく励まし、テキパキと仕事をこなす祥子さんの様子を、好ましく感じていました。

そして2日後、祥子さんの職場の机の上に、手紙が届きます。差出人は、杉山修。「一度、飲みに行きませんか? という誘いの手紙だったんです。飲みには行けないけれど、久しぶりに胸がドキドキする経験をさせてもらったことにお礼が言いたくて、私も返事を書きました」

女性にとっては、たとえ何歳になっても男性から手紙をもらうのはうれしいでき事。でも、祥子さんはこのでき事をすなおに喜ぶことはできませんでした。そのとき祥子さんは、

1歳半の祥吾くんという子どもを育てる「未婚の母」だったのです。

未婚の母に。看護婦をして、ひひび育ててみせる

祥子さんが祥吾くんを出産したのは、24歳のときでした。短大を卒業後、22歳で看護婦の資格をとり、県立総合病院の呼吸器内科で働き始めて3年目。「多いときには、一晩に2人の患者さんの死に立ち合うこともあった」という職場は、若い女性にとって精神的にも、肉体的にも楽なものではなかったでしょう。でも、看護婦という仕事のやりがいとおもしろさがようやくわかりかけてきたやさきのことでした。

「その当時、結婚を考えてつきあっていた男性がいたんです。でも、いつまでたっても親に会わせてくれなかったり、ときどき居どころがわからなくなったりすることがあって、そんな不誠実な態度にだんだん不信感がわいてきたんですね。別れる話を切りだしたのは、私のほうからでした」

相手の男性がどういう人であれ、相手に頼りっぱなしの生き方ではなく、しっかり地に足をつけ、一步一步踏みしめながら自分の力で前に進む生き方をしたい、と考えていた祥子さん。

トラック運転手という仕事を持つ夫がいても、自分は自分でりっぱに商売を切り盛りし、



左が優市くん、右が花菜ちゃん。2人とも出生時2000g以上あり、生育も順調

夫の留守を守っていたお母さんの姿から、祥子さんは女性も自分の手で生きるものだ、ということをお教へてもらったといいます。それなのに、すっかり相手にふり回されている自分が情けなく思え、そこに相手の不誠実さも加わって、ついに別れる決心をしたのでした。

ところが、この男性と別れて1カ月後、かねてから生理不順が気になっていた祥子さんは、診察に訪れた産婦人科で、思いもかけない診断を聞かされることになります。「赤ちゃん、できてますねって言われたんです。しかも、3カ月の終わり。一瞬、あらーっ、どうしよう、って思いました。でも、先生がおなかをエコー（超音波診断装置）で見せてくださったら、赤ちゃんの小

第1章 家族までの長い道のり

平成3年1月。祥子さんは祥吾くんを抱いてお宮参りをした。「2人で生きていく」と、祥吾くんの父親からは養育費ももらわなかった



さな心臓がポンポンって動いているんですよ、まだ3カ月なのに。そうしたら、ああ、私の赤ちゃんがいるんだって感じで、おろすなんていう気になれなくて。それっきり、もう生むことしか考えませんでした」

最初に連絡をしたのは、父親である別れた男性。「おろしてくれ」と言い張る彼に、祥子さんは「子どもは自分ひとりで育てるから、せめて生んでもいいと言ってほしい」と頼み



平成5年1月、子連れ結婚式を挙げた

ました。でも、彼が認知してくれないまま、おなかは大きくなっていきます。

そんな祥子さんの背中を押してくれたのは、やはりお母さんでした。

「あなたはなんのために看護婦になったの。看護婦という仕事を持っていれば、たとえばこういう状況になったときでも、ひとりで子どもを育てていくだけの経済力を持っていられるからだったんじゃないの」

お母さんのひと言で、祥子さんは「これからは赤ちゃんの命を、自分のおなかから無事に生み出すことだけを考えよう」と吹っ切れ、そのための努力を始めます。

「子どもをひとりで育てていくには、私に仕事があるということがたいせつでしょう。だから、職場で一緒に働いている先輩や婦長さんに『子どもを生みたい。迷惑をかけることがあると思うけれど、仕事をつづけさせてほしい』とお願いしました」

祥子さんは出産6週前に準夜勤（午後4時半～翌深夜0時半）明けのまま産休に入るまで、ふだんと全く変わらずに看護婦の仕事をつづけます。

平成2年12月。結局、胎児認知が得られないまま、祥子さんは帝王切開で男の子を出産します。

「先生から『生まれましたよ』って聞いたとたん、涙がポロポロ出てきて。だって、この子は中絶しようと思えばおろせたし、妊娠中も仕事をつづけていたから流産の可能性もあ

ったし、帝王切開の難産だったし、生まれる前から何度も生命の危険にさらされているわけでしょう。なのに、ずっと私のおなかに精いっぱいしがみついていた。その子をこの世に生み出してあげられたという思いが強かったんですね」

この男の子に、祥子さんは「祥吾」という名前をつけます。「祥子」の「吾が子」、これはだれの子でもない、私の子どもだ。母親の私が自分で育てていく子なんだ、という祥子さんの思いが込められた名前です。

祥吾くんの実の父親にあたる人は、たった一度だけ祥吾くんを腕に抱き、「認知」の書類を届け出たきり、きょうまでなんの連絡もないままになっています。

出産後、祥子さんは祥吾くんの世話をお母さんに頼み、看護婦の仕事に戻ります。浜名湖にほど近い家から、静岡市内の病院までの新幹線通勤が始まりました。

当時、祥子さんの手取り月収は15～16万円程度。病院側のはからいで、夜勤を免除してもらっていたので、出産前の20万円ほどあった月収よりはダウンしましたが、母子2人で生活していくには十分の収入を確保するめどと自信ができました。

そして、平成3年5月に祥子さんは、のちに修さんと移動献血車で出会うことになる、浜松血液センターに転職します。祥吾くんと過ごす時間を1分でも多くつくるために、実家の近くに見つけた職場です。